

# 円滑な小学校外国語活動導入に向けて — 一小・中連携と評価の課題を考える —

平成 22 年度鳴門教育大学小学校英語教育センターシンポジウム基調講演

直山木綿子 (NAOYAMA Yuko)

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

いよいよ来年 4 月から本格的に外国語活動が始まりますが、スムーズに各学校で進めていただけるようにということで、今日は外国語活動の課題についてお話をさせていただきたいと思います。

90 分間でお話をさせていただきますことは大きく三つです。最初に、98%の学校が外国語活動に取り組まれています、その中で出てきている課題をお話しさせていただきます。次に課題のもとは何なのかを考えたいと思います。ここには小学校の先生、中学校の先生あるいは小学校の支援員の方がいらっしゃいますが、子どもたちに直接関わる者として、その課題に対してどういう具合に対処したら良いのか、何を理解しておくべきなのかを三つ目にお話ししようと思います。

課題についてはたくさんありますので、その中から二つ取り上げてお話をしたいと思います。現在、日本を 5 ブロックに分けて「外国語活動指導者養成研修講座」が独立行政法人教員研修センターと文部科学省主催・共催で開催されています。そしてその講座が水、木、金と徳島県教育委員会主催で開催されました。それまでに北海道・東北ブロック、九州・中国ブロック、関東・甲信越ブロックでも行ってきたわけですが、どの地域でも言われることは、「まず先生方が外国語活動について基本的な理解をしなければいけない」ということでした。確かにそうなのですが、私は外国語活動の一番大きな課題の一つに、まず「小中連携」を挙げています。



なぜかといえば、小学校の外国語活動の成果はなかなか目に見えないからです。つまり、中学校の（英語科の）ようにリスニングが何ポイント（点）、スピーキングが何ポイント（点）というように数字で表すことができないために、小学校外国語活動で子どもたちがつけてきた力というのが「はい、これ」という

ふうに目に見えて分からないのです。私は、子どもたちが小学校外国語活動で身につけた力を発揮できるのは、中学校英語科の勉強を本格的に始めてからだと思っています。「小中連携」というと、中学校の英語の先生が（取り組むべきこと）のように捉えられがちですが、小学校の先生にとっても、自分たちがやってきたことがどうなるのかということについて非常に意識をしてほしいと思います。

もう一つの課題は、いろいろな場所で授業を拝見する機会がありますが、「これが本当にコミュニケーション能力の素地を養う方向にむかっているのか」というような授業に出会うことです。それでは、「小中連携」とは何ができていたらいいのでしょうか。「小小連携」ができていないと絶対に「小中連携」はあり得ないと考えています。また「小小連携」が成り立つためには、それぞれの小学校でしっかりと取り組みが行われていないといけないということになります。実際には、先生方がよくおっしゃるのは、外国語活動の指導にあたるのは5、6年の先生方だけで、教育課程外での指導や特区（教育課程特例校）や研究開発学校以外では、1年から4年の先生方はほとんど外国語活動の指導に当たらないということです。そうすると1年から4年までの先生方の外国語活動についての理解がなかなか進まないということになります。5、6年の先生方だけで取り組んでいる場合、新しいものに対する負担感、授業に対する不安感などで、実際の授業に関わらない先生方には理解が進まないということです。1年から4年の先生方を含めて、学校として研修などに取り組む必要があるのです。1年から4年までの先生方も次の年度は5、6年生を担当する可能性もあるし、所属の学校が変わった場合には5、6年生を担当するかも知れないということを考えると、やはり学校全体として取り組むことが大切だと思うのです。

それでは、学校として取り組みを始めてもらうためにはどのボタンを押せばよいのでしょうか。そのためには（教職員）全員に理解をしてもらわなければなりません。全員が理解するということが、コミュニケーション能力の素地を養うということにつながります。繰り返しますが、どのボタンを押せばよいのでしょうか。それは「管理職」なのです。いろいろな地域を廻らせてもらって、「管理職」の意識が薄いところでは取り組みが深まっています。管理職の先生方に「教職員全員で外国語活動に取り組んでいかないといけない」という意識を持っていただくことは非常に大事だと思います。しかし、小中連携はそれだけでできるのかというと、やはり中学校の英語の先生方の意識も変わってもらわないと、いくら小学校の先生方だけががんばっても、いけないと思います。

コミュニケーション能力の素地を養う授業実践については、いろいろなところで既に取り組みがなされていますので、how toについてはよくご存じだと思います。でも「果たしてそれは外国語活動の目標に照らし合わせているのか」という評価の部分について見直すことが必要だと思っています。

さて、先生方の意識が変わって、評価からもう一度授業を見直すようになるには研修が必要だと思います。管理職の意識改革が行われ、各学校で研修がきちっと行われるためには教育委員会が動かなければなりません。つまり、教育委員会主導で管理職の先生方の研修をし、管理職の先生方の意識改革のするのです。また、校内においては2年間で30時間の研修を行うことになっています。教育委員会が主導して管理職の先生方の研修を行い、校内研修においては管理職の先生方にイニシアチブをとって頂く必要があります。

中学校の先生方や保護者の方々には外国語活動について誤解をなさっている方がいら

っしゃいますが、小学校の先生方が、中学校の先生方や保護者の方に伝えなければならないことは「小学校では英語を教えているわけではない」ということです。

このようなことが「小中連携」における大きな課題であると思います。管理職の意識改革、研修の対応、中学校教員の意識改革等について、教育委員会がイニシアチブをとるとはいえ、外国語活動の指導に当たっている私たちがどこをどのように取り込んでいくのか、「小中連携」をどう進めるのか、そして「評価」のことについて、このあとはこの2点に絞って話してお話したいと思います。

最初に「小中連携」から話を進めていきたいと思います。平成 23 年度に全面実施になります学習指導要領ですが、その学習指導要領の改善のポイントは六つあり、そのうちの一つに外国語教育の充実が挙げられています。つまり「外国語教育の充実」は改善のポイント六つのうちの一つに挙げられるくらい大きな課題ということなのです。このことを小中の教員は知っておくべきだと思います。

「外国語教育の充実」が課題としてあげられる背景には、(スクリーンを示して)赤字の部分は中学校に関してです。グローバル化への対応として、各国(特にアジア圏)では小学校への英語教育の導入がどんどん進んでいます。日本は(これらの国に対して)遅れるのではないかと懸念があります。ところが、赤字の部分に関しては、国が中学校に対して調査をかけたのですが、中学生に「基本的な語彙や文構造を活用する力が十分身についていない」「まとまりのある一貫した文を各地からが十分身についていない」という課題が出てきたわけです。

三つめは英語力(について)ではなくて、意識調査から「英語の授業が分からない」という意見が他教科に比べて割合が高いということです。今触れた「意識」の部分について具体を見てみると、教育課程実施状況調査では、5教科の中で、中1の段階ですでに(「授業が分からない」という子どもが)一番多いのがわかります。これを見た中学校の先生は「数学と変わらない」というかもしれません。しかし、2年、3年と進むにつれて、英語は「授業が分からない」という子どもが増えてきますが、数学は入試の関係もあるでしょうが、3年生になると増え方がおさまってきます。英語は増える一方です。英語に関しては28%の子どもが「分からない」と答えています。

さらに、数学の「授業が分からない」と答えた生徒は、中学校で分からなくなったわけではなく、小学校からの積み重ねをとおしてつくられたわけです。ところが、この段階では小学校に英語活動が導入されていないわけで、英語のこの数値は中学校3年間でつくられたわけです。つまり、3年間で「授業が分からない」子どもを一番多く作っているのは英語だというわけです。

そこで、なぜ中学校で英語の力がつかないのかを考えてみる中で、文部科学省ではコミュニケーション能力の素地を基礎の前につけなければ、基礎は身につかないのではないかと考えたわけです。そこで小学校では高学年に外国語活動を導入することでコミュニケーション能力の素地を養い、中学校では授業時数を増やすことでコミュニケーション能力の基礎を身につけさせ、高校では科目編成をすることでコミュニケーション能力そのものを身につけさせようとするに至りました。これが外国語教育の充実を図る計画というわけです。

実際に見てみますと、小学校では外国語活動を入れて聞く・話すを中心に5、6年生で

指導し、中学校では、4技能を総合的に力をつけることになっています。これは4技能を統合した指導をしなければならないということです。そして語彙を増やす。もちろん高校でも語数は増えます。

表1 小学校外国語活動と中学校外国語科の目標

小学校外国語活動の目標
① 言語や文化について体験的に理解を深め、 ② 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、 ③ 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、 コミュニケーション能力の素地を養う。
中学校外国語科の目標
① 言語や文化について理解を深め、 ② 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、 ③ 聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を養う。

小学校では聞くこと、話すことを中心に指導し、高校は英語で授業をすることを基本としています。つまり（小中高をとおしてみても）「サンドイッチ型」になっています。中学校は（小学校と高校に）挟まれているのです。言いかえると、中学校では、小学校でコミュニケーション能力の素地を養った子どもが入ってきて、高校に入るまでに、英語で授業を受けることに耐えうる子どもをそだてて卒業させなければならないということです。中学校の先生方は、小中、中高を見据えて頂かなければならないということをご理解下さい。

それでは、外国語活動に焦点を当ててお話しします。外国語活動がうまくいくためには、中学校の先生方に小学校外国語活動のことを十分ご理解頂く必要があります。当然、小学校の先生もコミュニケーション能力の素地を身につけさせる指導をして頂かなければなりませんので、外国語活動のことを十分理解して頂かなければなりません。（スクリーンに示して）これは外国語活動の目標です。これは三つの柱から成り立っています。小中の目標を見比べてみると、中学校では3つめの柱を最後に置くことによって、三つ目の柱が最重要項目であることを意味しています。つまり外国語の技能を身につけることが第1のねらいであることを強調しているわけです。

小学校の目標に見られる「慣れ親しみ」は定着を目標とはしていません。何度も同じ英語が出てきますが忘れても構わないということです。しかし中学校では定着を求めているために、新しい言語材料は過去の言語材料が定着しているということが前提となつてすすめられます。

いままで行われてきた、総合的な学習の時間の中のいわゆる「英語活動」は、中学校では、枠組み上、総合的な学習の時間につながっていました。ところが今度の外国語活動は新しい領域ですから、コミュニケーション能力という言葉で、中学校の外国語科につながります。コミュニケーション能力という言葉で小中高がつながっているわけです。

「小中連携」について、「情報交換」は小中の先生方が取り組みの様子を伝え合うことだと思います。その次に生まれるのが交流だと考えます。「交流」とは同じ時と場を共有し



であるものを作り出すことだと考えます。例えば授業参観だけなら情報交換ですが、その後の研究協議では互いの意見を戦わせながら今後の方向を探ります。これは「交流」だと考えます。あるいは中学校の先生が小学校に指導に来ることも、またその逆も交流だと考えます。「交流」には4種類あると考えます。小学校の先生と中学校の先生、小学校の先生と中学生、中学校の先生と児童、中学生と児童です。私は中学生と児童の交流は非常に有効だと考えます。中学生が小学生に習ったことを披露すると、中学生にしたら英語学習に対する動機付けになりますし、小学生にとっては中学校英語に対するあこがれの感情をはぐくむことになります。「連携」とは内容の上で距離が縮まることを意味すると思います。「一貫」とは形の上で距離が縮まることをいうと思います。例えば「同じ建物で学習する」「向かい合わせの学校になる」みたいなものです。私は「情報交換」があって「交流」があって「連携」が生まれると考えています。

それでは「連携」とは何なのでしょう。私は「連携」とは「カリキュラムの連携」と捉えています。「カリキュラムの連携」には三つあると考えます。「目標の一貫性」「指導法の継続性」「学習内容の系統性」です。なかでも「指導法の継続性」は工夫をいただく必要があると思います。「目標の一貫性」については学習指導要領で規定されています。また、「学習内容の系統性」についても教科書等で系統性が図られています。しかしながら、指導法に関しては、中学校の先生方は小学校での指導法を踏まえて中学校での指導をして頂かないと「指導法の継続性」とはならず、ひいては「連携」とは言えなくなってしまいます。

「指導法の継続性」については2点あると思います。一つは小学校で使った教材を中学校の接続期で使って頂くこと、もう一つは小学校の外国語活動で体験した活動を中学校英語の入門機での導入で活用して頂くことです。肝心なのは先生にとっての小中連携ではないということです。子どもにとっての小中連携を考えることが必要なのです。そこで、中学校の先生方は是非一度『英語ノート』をご覧いただきたいと思います。

小学校では、児童は「あいまい」に聞いています。この「あいまいさ」を中学校では「正確さ」に変えてほしいと思います。その「あいまいさ」を「正確さ」に変えるためには文字が必要だと考えます。しかし、小学校で外国語活動を経験してきた子どもたちの方が文字に対して「読みたい」「書きたい」という願いを強くもっていますが、なまじっか音声中心で進んできているだけに、外国語活動を経験してきていない子どもたちよりもより細かな指導をしないと、ハレーションが大きいと感じてきました。丁寧に文字の指導をしてやってほしいと思います。

次に評価についてです。総合的が学習の時間における英語活動の評価は、目標や内容、評価の観点各学校で決めて文章記述で評価していました。外国語活動の移行期間においても各学校で決めていました。ところが平成23年度からは評価の観点を設置者（教育委員会）が決めます。そして各学校は設置者が決めた評価の観点到追加をすることが可能になっています。なお、参考として外国語活動の評価の3観点については国が例示をしました（次頁の表2参照）。（この後、指導案（例）を用いて評価の観点判別ワークショップ）

しかし、評価に対して気負いを感じられるのは確かですが、評価に対して神経質になりすぎないようにしてほしいと考えています。また1時間に三つの観点を盛り込むのではなく評価の場面を精選してほしいと考えています。確かに国は外国語活動の評価の観点を例示しましたが、1単元に三つの観点を含まれることを基本として、1年間で3観点を見取るこ

とをお願いしております。さらに、それぞれの観点ごとに、子どもについての力を文章で記述してほしいと思います。最後に、評価に関して、注意してほしいことに、三つめの観点「言葉や文化に関する気付き」が抜けることが多いことがあります。ぜひ3観点を1年間で見取るようにして頂きたいと思います。  
ご静聴ありがとうございました。

表2 評価の観点及びその趣旨<小学校外国語活動の記録>

観 点	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に対する気付 き
趣 旨	コミュニケーションに関心を趣もち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。

※付記：なお本基調講演の報告は録画されたものをもとに書きおこしたもので、文言等編集者で一部変更をしております。